

○司会（比嘉） けさのセッションの司会をさせていただきます、比嘉でございます。

私にとりまして、今回アメリカからのご来賓をご紹介しますのは光栄でございます。P.ダー先生でございます。

ダー先生は、コミュニケーションの分野でアメリカのニューヨーク大学から1970年に学位を取られました。その後、いろいろなメディアを教育目的に生かすということをご専門として研究していらっしゃいまして、この分野でたくさん論文をご発表でございます。1977年来ダー先生は、一般にCPBと呼ばれている Corporation for Public Broadcasting に参画なさいました。この法人は Annenberg Project で知られている組織でございます。現在は研究部門のアソシエート・ディレクターでいらっしゃいまして、この Annenberg/CPB Project の評価研究をしていらっしゃいます。

本日で発表くださいますのは、アメリカにおける遠隔学習者に関する報告でございます。これを通しましてこのプロジェクトがどのような形で進捗しているか、また、どのような業績を上げているかがわかるものと思います。

隣にお座わりの女性はダー夫人でいらっしゃいます。

ダー先生、どうぞ。

## 合衆国における学生のテレビ教育番組の利用について

○ダー 皆様、このような機会を設けて頂きまして有難うございます。今日は、合衆国における学生のテレビ教育番組（テレ・コース）の利用に関する最近の調査結果をお話したいと思います。そして、これからの二日間で皆様のお話を聞かせて頂くのを楽しみにしております。

私の所見はアンネンバーグ/CPB研究企画の委託で行われた研究成果に基づいております。この研究は、1984/85学年度に行われたものです。研究途上であって、暫定的なデータしか得られていない部分もございます。

すでにお手元に、アンネンバーグ/CPB研究企画、研究課題、調査結果について書かれたものが渡っているかと思います。私の所見は、調査結果を扱った部分にまで渡ることになります。特に、私は、学生がテレ・コースを構成す

る様々な要素をどのように利用し、番組をどのように評価し、またキャンパスで教えられている通常のコースと比較してどのような学習成果を上げているかに注目致しました。

ここでご注意願いたいのは、私がテレ・コースと申しますのは、13週から15週にわたる完全な教育コースのことです。テレビ番組と1冊以上の教科書、学習手引、教職員手引から成り、通信または電話で教授陣と接触を保ち、学習会への参加が義務づけられるか奨励されるかしているものであります。

中心的にお話したい研究には、1984年の秋学期に5つのコースに登録した200名の学生に対する「フォーカス・グループ」インタビューを含んでおります。

- (1) まず、「どのような人間が登録しているか」という発問がなされます。
- (2) 62%が女性で、38%が男性でした。これは、合衆国のテレ・コースに登録している者の割合にほぼ一致しております。
- (3) 通常の大学就学年齢（18才から22才）の者は、10人中2人以下でした。もっとも半分以上が35才以下でした。
- (4) 14%は、民族的少数者でありました。これは、大学生人口に見られる比率とほぼ同じでありました。
- (5) 約半数が、二年制コースを取り、残りの半数は四年制コースを取っています。これもまた、大学就学人口におけるのと同じ割合です。
- (6) 4人中3人が、家庭の外でフル・タイムまたはパート・タイムで働いています。残りの10%は、専業主婦でした。
- (7) 一年生から四年生までの学生のバラつきはほぼ均等で、僅かではあります。二年生が他の学年より多いようであります。約四分の一が、学位取得プログラムに入っていません。
- (8) ほとんど全てが、以前に一つまたはそれ以上のコースを通常の大学で取得しており、ほぼ半数が現在通常大学のコースを取得しています。このことから、私達は、テレ・コース取得者が「孤立した」学生であるという仮説を考え直さなければなりません。

後に行った数人の学生とのインタビューは、多くの学生が学位取得を早めるためにテレ・コースを取っているということを示唆しております。私達は、この事実の経済的意味合いをまだ考えておりません。

(9) 57%の者にとっては、これが初めてのテレ・コース登録でありました。

(10) ほとんどのものが、高度の学習意欲を持っています。約40%が学士を取得することを希望し、40%が修士号、または博士号を取りたいと考えています。これは、半数のものが2年制コースに登録しているということを考慮すると、特に興味深いことであります。

(11) 驚かされるのは、学生の40%がビデオ・デッキを持っているということです。これは、ビデオ・デッキ所有世帯の合衆国全世帯に占める割合の二倍に当たります。

(12) 私達は、これらの学生がテレ・コースを取ることにした理由も知りたいと思っていました。半数が、便利だからということでありました。通学に費やす時間を最小にしようと考えたということでした。

(13) 最後に、学生がどのようにしてこのコースを知ったかということにも関心が注がれました。多くの場合、ラジオ、テレビ、新聞の広告を通してよりもむしろ大学のカタログと小冊子によって知ったということでした。友人や学生仲間のアドバイスも無視できませんでした。これらのデータは、二通りに解釈することができます。すなわち、広告という方法自体が、学生を惹きつける効果的な方法ではなかったとみなすこともできますし、大学による広告の利用法（または利用しなかった仕方）が効果的でなかったとみなすこともできるのです。

(14) 次に、学生がコースを取るようになった背景についても知りたいと考えました。最初に、テレビ番組について質問しました。

(15) 学生にとって他の時間帯や他の曜日より特に好都合であるといった時間帯や曜日があるわけではないことが分かりました。しかし、面白いことに、木曜日と金曜日が最も嫌われ、土曜日と日曜日が最も好まれています。

(16) 私達が知った非常に面白いことは、学生は週一回一時間の番組を見るこ

との方を、週二回三十分の番組を見ることより好むということであります。時間を調整するのは難しいようですが、調整しようとする場合は、三十分あけるのも一時間あけるのも同じだということでした。このことは、コースの計画を立てる上での示唆を与えております。というのは、従来私達は、週二回三十分のコースを組む傾向を持っていたためです。

(17) 学生の60%は、家で一人で番組を見ておりますが、25%は家族と一緒に見ております。また、学生の半数が番組を見ながらノートを取っているということでありました。

(18) 学生向けの学習手引の多くは、テレビ番組を見る前に印刷物を読んでおくことを学生に勧めていますが、学生による印刷物の利用には、決まったパターンはありませんでした。ある者は番組を見る前に印刷物に目を通し、ある者は番組を見た後に読んでいるようです。強いてパターンを見いだそうとするなら、学習手引は番組の前に読まれ、教科書は番組の後で読まれるということでした。つまり、私達は、テレ・コースの教材をどのような順序で使用されても良いように作らなければならないということでした。

(19) 通常の大学において教えられているコースと比較したとき、学生が毎週各々のコースに費やす学習時間は、同種のコースではほぼ等しいということが分かりました。二年制の学生も四年制の学生も、テレ・コースとオン・キャンパスのコース各々のコースに、週3.5時間を費やすと答えています。

(20) 調査対象になった学生は、テレ・コースとオン・キャンパスでのコースを比較することも求められています。学生達の回答によれば、テレ・コースはより多くの自己修養を必要とするが自分のペースで学ぶことができ、テレビの方が高度の学問を教えているので収穫が多く、またスケジュール的にも便利であるということでありました。

(21) 私達が次に注目したのは、テレ・コース提供において機関が果たしている役割についてであります。学習会やその他の補助業務がどの程度利用し易いか、またどのような補助業務が最も効果的であるかといったことが問われました。

(22) どのような学生補助業務を行っていくかは、コースを提供している各大学が決定しています。二年制大学も四年制大学も同じように通常、参加義務のある学習会を2回と任意参加の学習会を1回設けております。五人に一人はどの学習会にも参加しませんでした。大半の学生はすべて、乃至はほとんどの学習会に参加しました。

(23) ほとんどの学生は、学習会の回数は「ちょうど良い」と考えております。不満を唱えている者は、回数が多い方が良いと考える者がほとんどでした。

(24) テレビを通した授業と印刷物を除けば、学習会は学生とコースを結ぶ主要なものであります。平均3回の学習会への参加に加えて、学生は通信と電話で平均1回ずつ教師に連絡をとっています。学習会以外で教師やコース仲間と個人的に会う学生は、極めて稀でした。

(25) 一般に、学生は、必要な時に教師に連絡をとることは容易であったと答えています。

(26) 学生は各コースで平均、2回の試験と1回の小テストを受けています。試験は、○×式問題と論述式問題から構成されています。方式はコースによって多様であります。それはオン・キャンパスで教えられているコースの方式や量と大差ありません。

(27) テレ・コース改善のために諸機関は何をするべきかが、学生に問われました。学生が主に提唱したことは、新しいコースを設けてコースの数を増やすこと、放送を見られなかった時に番組を見ることができるようビデオを揃えること、もっと頻繁に番組を放送すること、教師と接触する機会を増やすこと等でした。

(28) 私達は、学生がテレ・コースを構成している各々のものをどのように評価しているかを知りたいと考えました。実質的にはすべての学生がオン・キャンパスでのコースを取得したり、別のテレ・コースを取得したりしているので、皆、現在取っているものと比較すべき素材を持ち合わせていることとなります。

(29) 学生達は、印刷物を4つの側面から、非常に肯定的な評価から非常に否

定的な評価に至るランク付けをするように求められました。例えば、非常に教育的で有益であるという段階から、全く役に立たないという段階に至る評価を求められたのです。印刷物の4つの側面すべてについて肯定的な評価が得られました。また、教科書と学習手引に対する評価はほぼ等しかったと言えます。面白いことに、教科書は、明解であるというより教育的であるという評価を得ています。

(30) 同様に、テレビを使った授業は、4つの側面すべてについて等しく有効であるとみなされています。

(31) 以前に取得したテレ・コースと現在のものの難解度とを比較した場合、学習手引の難解度は変わらないが、教科書は難しくなったという回答が得られました。このことは、特に四年制のプログラムで学習している者が訴えています。

(32) 10人中8人がテレ・コースに非常に満足していると答えています。ほぼ同じ比率の者が、友人にテレ・コースをとることを勧めています。そして、10人中9人が、現在とっているコースを基にした別のテレ・コースをとることを希望しています。

(33) 以上のことから、次のような結論が導かれると思われます。そして、その結論は、企画要員と製作者と大学がテレ・コースを提供していく際に内的指針となると考えられます。

(34) まず、テレ・コースを取得している学生すべてが、孤立しているわけではないということが分かりました。すべての学生とは言わないまでも多くの者が、コースが提供されている期間中、定期的に大学に足を運ぶことが出来るのです。

第二に、ダイレクト・メールとメディアを使った広告をもっと効果的に利用することによって、テレ・コースを取得する可能性のある者の関心を捉え、コースに登録する者の数を増やすことが出来るのではないかとのことです。

(35) 私達は、私達のコースを利用している大学を促して、学生が放送番組と

学習会のスケジュールを組むときにその手助けをしてもらっています。学生達は、コースの課題に加えて職業上の責任や家庭での責任を抱えているので、スケジュールの調整は、彼らにとって一つの難題となっているということも分かりました。

(36) 大学は、テレ・コースでは非常に多くのことが課されるということを学生によく分からせるべきであります。私達は、コースを放棄した者のことを調べる別の調査を始めました。正確に測定することは難しいのですが、およそ35%から40%の者がコースを放棄したと考えられます。これは、オン・キャンパスで教えられるコースを放棄する者の比率と通信教育によるコースを放棄する者の比率のほぼ中間であります。放棄する者の比率がこのように高いのは、学生の中にはテレ・コースは易しいであろうと考えて登録し、それがあまりに多くを課すことに驚いて放棄するという者がいるためであると、私達は考えております。テレ・コースから多くを学ぶか否かは、その学生がどのくらい自律的に学びコースにコミットするか、またどのくらい確固とした動機づけを持っているかによって決まると思われます。

(37) テレ・コースは、教師に対しても多くを課しております。教師は、テレ・コースの学生に対しては、オン・キャンパスで教えている学生に対するよりももっと個人的に関わらなければなりません。また、学生の相談に応じる時間を設ける場合にも、より柔軟に構えなければなりません。本年度私達が調べようとしていることは、テレ・コースにおける教職員の役割が通常の場合とどのように異なるのかということと、行政官はテレ・コースの教員を選ぶ時にどのような特徴を持つ人物を捜すのかということとあります。

(38) コースを構成している教材は、どのような順序で使用されても有効であるようにすることが大事です。学生による教材の利用法は様々であるので、その多様性に答え得るものでなければならないのです。

(39) 学生の学習手引が果たす役割は特に重要です。学習手引は、学習の目的を明確に述べていなければなりません。また、各章の要旨やコースの大意、用語解、自己診断テストが掲載されていなければなりません。学習手引こそ、そ

のコースに学生を導く「地図」なのです。そして、コースを構成する様々なものを統合するものでなければならないのです。新しい情報を盛り込むことは学習手引にとって不可欠のことではありませんが、新しい情報があれば、学生のコースに対する満足度は高まると思われます。また、先ほどは申し上げませんでしたが、学生によれば、自己診断のためのテストは自分がコースでどのくらい多くを習得したかを知る上で重要であるということでありました。通常は教師がこうした機能を果たしているので、教師と定期的に接触しない学生にとっては自己診断のためのテストは特に重要であると考えられます。

(40) 先ほども申し上げましたように、学生は1時間番組を30分番組より好むことが分かっております。

私達の経験が皆様の御参考になればと思います。私は、最近のコースのビデオテープを3本持参いたしました。「機械的宇宙」，「アメリカ経済」，「実用的な目的のために：数学入門」の3本です。ご希望がございましたら、ご覧にいたいと存じますが、こちらに差し上げたいと思っておりますので、ご都合の宜しい折りに番組を通してご覧頂ければと思います。

天城先生，阿部先生，浜野先生，今回のご招待を誠に感謝致します。これから二日にわたって、日本のテレ・コース使用について伺えることを楽しみにしております。

ご質問がございましたら、喜んでお答えしたいと思います。

●調査の評価の結果と、各大学で採点の結果はどう関係しているのでしょうか。また、番組を制作する際に、各大学の先生とどういった打ち合わせをするのでしょうか。

ダー 各大学からの評価はおおむね肯定的で、学問的にレベルが高いと評価されています。ただ、このコースを採用しない場合には二つの理由があります。一つは、コースの中に伝統的な学問の専門分野の枠に入らないものがあって、



既成の大学の学部と合わない。例えば、学問的にレベルが高いと評価された「ブレン」の場合も、こういった形でそれを利用したらいいかわからないという大学もありました。二つ目は、10 週のコースとして制作したものが、一般の大学の13週とか14週の授業と合わないといったことが理由になっていたりします。

制作に関しては、我々は自主制作せず、資金援助をしているだけで、コースを作りたいと申し出たチームがそのまま作ることになります。資金援助の選考の時には、制作者と学者の資格を調べ、他の人間からどう評価されているかが基準になります。

●学生の自己管理能力に対する配慮はどうしているのでしょうか。また、成人学習者に対する特別な配慮はあるのでしょうか。

ダー 確かにテレビコースの場合に自己管理は問題になります。それは重要な問題であり、こういった面の研究をこれから進めようと考えています。

成人学習者については、むしろテレビコースに最適な学生で、それは彼等が十分な動機と、経験にもとづく自己管理能力を持っているからです。

●テストについてはどうでしょうか。

ダー 我々はテストを担当せず、各大学がテストを行っています。ただし、我々が用意したテスト・バンクの中から各大学が独自に利用するということはあります。したがって、コースは同じでも大学ごとにそのやり方や内容が違うわけです。

また近くに大学がない学生のために、全米に6箇所、資格取得のためのコースを与える大学を選び、大学と連絡をとりながら地元でテストが受けられるようにしました。

●アンネンバーグ・プロジェクトの総額は小型の放送大学を作るのに相当する額ですが、そうするつもりはなかったのでしょうか。あったとしたら、なぜそうしなかったのでしょうか。

ダー 実際、プロジェクトを始めたアンネンバーグ氏は放送大学を考えていました。ところが調査の結果、22 歳以上の人はテレ・コースを求めていること

がわかったのです。第二点は、それだけの金額では15年にわたって放送大学を  
経営していくのは無理だとわかったからです。また、全国にサービスを提供す  
る放送大学では、既成の大学に受け入れられず、その結果サービスが低下した  
り、単位が既成の大学で認められなくなる危険性がありました。

●既成の大学はテレ・コースの単位を認めているでしょうか。

ダー これは非常に難しい問題で、単位の換算は簡単ではありません。それ  
は一般の大学での問題と変わらないのです。学生にはテレ・コースが地元の大  
学で受入られるか、大学に尋ねるように指導しています。6箇所大学を選ぶ  
場合には、学問上の助言を与えるシステムがあるかどうかを調べました。

### 放送大学学生調査

○司会 先ほどのダー先生の Annenberg/CPB Project に関するご発表  
を通して、アメリカにおける放送教育の発展を私たちは知ることができました  
が、今度は、あちらにおいでになられます4名の方々に、「第一回放送大学学  
生調査」と題して、日本における放送教育について発表をお願いすることにい  
たします。

発表者を簡単にご紹介いたします。一番右の方に座っておられますのは、甲  
田和衛先生でございます。甲田先生は東京帝国大学をお出になられましてから、  
政府の総理府などにお勤めになり、その後大阪大学の教授になられました。そ  
して昭和58年に放送大学の教授になられまして、ことしの4月から放送大学の  
副学長として、放送大学の発展に現在お尽くしのところでございます。

次におられますのが岩永雅也放送教育開発センター助手でございます。

次に、同じく放送教育開発センターの柴山盛生助教授でございます。

そして同じく、放送教育開発センターの塩崎千枝子助手でございます。

まず最初に甲田先生に発表していただきまして、それからあとのお三方に発  
表していただき、最後にもう一度甲田先生におまとめをお願いすることにいた  
します。

では、甲田先生、よろしくお願いします。

## 放送大学の学生とは

○甲田 先ほどドクター・ダーの大変興味深いスライドを見せていただきましたが、実はこのスライドをこの討論の前に拝見しておりましたら、そこで取り上げられたそれぞれの問題を日本の放送大学との比較でもう少し申し上げることができたかと思えますけれども、残念ながらそれができません。

先ほどから取り上げられました問題の一つ一つは、私どもがいつも直面している問題だったものですから、実は一つ一つ身にこたえたんですが、ただ一つだけ不満を覚えたのは、ドクター・ダーが結論のところで、こういうことだけは非常に困るのだ、ということは余りおっしゃらなかったということです。

しかし、「だから放送大学をつくることを断念したんだ」というあたりのお話を聞いて、なるほどそうだったのか、という一つの納得をいたしました。なぜかと申しますと、ドクター・ダーがさっき結論のところでも、これらの学生はノット・アイソレーテッドだとおっしゃったんですけれども、私どもにとっては、いま相手にしている学生が本当に孤立しているのかいないのかということが、一つの大きな関心事であるからです。

そんなわけで、きょう私がご報告申し上げますのは後で発表される、8月にうちの大学の学生ほぼ1千名を対象にいたしました調査とは別に、今年の6月でございますが、私どもの大学の非常勤講師をしている勝田さんがしてくださった調査を、私がまとめたものでございます。（資料46ページ～50ページ）

細かな数字は別としまして、大体82名ばかりの、実際に面接授業に出席している学生を対象にいたしました。男女ともに30代、40代という人たちで、高等学校を出ている者が60%ぐらい。

大変驚きましたことは、月収の平均が60万を超える者が10%以上、80人の中で、月収百万円を超える者が二人おります。つまり、このくらい、かなり経済的に豊かな、したがって、自分だけが勉強するための部屋とか机を半分は持っておりますし、先ほどもお話ができましたけれども、放送大学の授業を視聴するためのVTRも、6割は持っております。また、自分の収入だけで授業料を納めているのが85%でございます。そういう非常に恵まれた学習条件と環境にある

ものだということを申し上げることができます。

この人たちが放送大学に関心を持ちましたのは、何よりも時間的に拘束されないということ、もう一つは、学士号をとることができるというようなことで関心を示しておったのですが、この4月に入学して本当に何を期待したかと申しますと、自分の教養を高めるというのが4割いるんですけれども、あとは学士号を欲しい者が18%というふうに、自分たちの教養を高めたいという者と、学士号を欲しいという者との二極分化いたします。

大体そういう人たちが面接授業に出てきてそるんですが、困りましたことに、これは社会調査を受講している人たちなんですけれども、なぜこの面接授業を選択したかと聞きますと、自分の仕事に役に立つからということよりも、その授業が設定されている曜日の都合がいいんだという者の方が多いのです。ですから、そういう点でかなり考えなければならないことがあるということが一つです。

それから、入ってみまして、放送大学そのものにはそんなに不満な点はないんだけれども、ただし、入ってから自分の仕事あるいは家事・育事というようなものについて、何らかの望ましくない影響があったと考えている者が、ほぼ半分はいるということでもあります。

こういう結果から、面接授業と申しますのが、私どもが放送しております放送授業というものとは、直接には結びついていないということが、何よりも第一に申し上げることができると思います。

それから、繰り返しになりますけれども、教養を高めたいという者と学士号を得たいというものとははっきり分かれるということが二番目です。

三番目は、放送大学に入りまして、どんな望ましくない影響があったかという中身はよくわからないのですけれども、方々にありますカルチャー・センターのようなところに行っている人たちに学士号を与えるということ、結果としてそうなるということでは私どもとしては困るのではないかというようなことも前提といたしまして、以下、今度は本学の学生千名ちょっとについて調査をいたしました。そのそれぞれの分について、報告していただきます。

## 調 査 か ら

○岩永 今回行いました私どもの調査は、これまでの既成大学に学ぶ学生と、恐らくさまざまな点で異なっているであろうと思われる放送大学の学生が、端的にいったどんな人たちなのかということを知るためのものです。ですから、その学生さんたちがおおよそ放送大学にどういう形で関係しているかに関することであれば何でも尋ねるという姿勢で調査を始めました。したがって、この報告も、何かはっきりした一つの筋を展開するというよりも、調査結果からわかることをファクト・ファインディングの形で述べるというふうにさせていたきたいと思います。

では内容に入ります。調査対象学生の基本的属性は、次のとおりです。

図表 1 - 1 調査対象学生の基本的属性

	サ ン プ ル		母 集 団	
A. 性				
男 性	4 3 9 人	4 3.0 %	4,2 5 3 人	5 2.1 %
女 性	5 8 3 人	5 7.0 %	3,9 0 4 人	4 7.9 %
B. 年 齢				
18～24	1 2 2 人	1 1.9 %	1,7 8 2 人	2 1.8 %
25～34	2 5 5 人	2 5.0 %	2,2 6 4 人	2 7.8 %
35～44	3 5 1 人	3 4.3 %	2,5 3 0 人	3 1.0 %
45～54	2 2 9 人	2 2.4 %	1,2 9 4 人	1 5.9 %
55～	6 5 人	5.9 %	2 8 7 人	3.5 %
C. 学 歴				
高 卒	7 2 3 人	7 0.7 %	6,2 1 1 人	7 6.1 %
短大卒	2 2 3 人	2 1.8 %	1,3 6 8 人	1 6.8 %
大 卒	6 5 人	6.5 %	5 2 7 人	6.5 %
D. 学習センター				
群 馬	1 4 7 人	1 4.4 %	5 8 4 人	7.2 %
埼 玉	1 3 2 人	1 2.9 %	9 6 7 人	1 1.9 %
千 葉	2 0 1 人	1 9.7 %	1,5 0 3 人	1 8.4 %
東京第一	1 9 7 人	1 9.3 %	1,6 6 9 人	2 0.5 %
東京第二	1 7 6 人	1 7.2 %	2,3 1 0 人	2 8.3 %
神奈川	1 6 9 人	1 6.5 %	1,1 2 4 人	1 3.7 %

調査の対象となった1,022人の人たちは、母集団つまり全科履修学生全体よりもやや女性が多く、また、やや若い人が少ないという傾向が出ております。

次に〈入学の動機・学歴観〉ですが、入学の動機で顕著なのは、大卒資格を目的にしている者の年齢による偏差が大きいということです。次の二つの表を見ていただきますと、下の表、年齢カテゴリーで五つに分けたところがあります。五番目の「大卒ノ資格ホシイ」というところが非常に顕著に右下がりにな

図表1-2 入学の動機・学歴観

基本属性 調査項目	全 体 (N)	年 齢 カ テ ゴ リ ー					学 歴			
		(1022)	18-24 (122)	25-34 (255)	35-44 (351)	45-54 (229)	55- (60)	高 卒 (723)	短大卒 (223)	大 卒 (65)
入学の動機 (複数選択) (N=1016)										
1. 教養ヲ身ニツケル	42.2	50.8	46.3	39.0	39.3	33.3	45.0	36.3	27.7	
2. 専門知識ヲ学ブ	36.6	42.6	33.7	38.2	35.4	30.0	32.6	44.4	47.7	
3. 不勉強ヲトリモドス	23.5	6.6	22.4	21.7	33.6	31.7	24.5	20.6	21.5	
4. 新時代ヘノ適応	19.6	6.6	13.3	22.5	25.8	30.0	19.2	17.0	30.8	
5. 大卒ノ資格ホシイ	43.4	68.0	50.6	41.3	31.0	18.3	48.0	39.0	1.5	
6. 余暇ヲ有効ニスゴス	16.1	6.6	11.8	19.7	14.8	35.0	14.9	16.6	27.7	
現代社会は学歴重視か実力重視か (N=937)										
1. 学歴重視ダ	74.3	69.6	70.4	76.6	76.1	80.4	74.6	75.4	69.0	
2. 実力重視ダ	9.9	11.6	10.7	8.0	12.2	5.9	10.3	8.9	8.6	
3. ドチラトモイエナイ	15.7	17.9	18.9	15.4	11.7	13.7	14.9	15.8	22.4	

っております。これと同じように右下がりになっておりますのが、一番上の「教養ヲ身ニツケル」というところでありまして、5.ほど顕著ではないのですけれども、右下がりの傾向を示しています。

これに対しまして3.4.6.の、「不勉強ヲトリモドス」、「新時代ヘノ適応」、

「余暇ヲ有効ニスゴス」という点につきましては、逆に右上がりになっている。つまり、年をとった方ほど、こういったものの回答率が高いということです。

こういったことからわかりますことは、「教養ヲ身ニツケル」と「大卒ノ資格ホシイ」は同じように推移するということで、いままでのように一般教養か大卒の資格かという二分法で物を考えることが限界にきているんじゃないかという感じがするのです。もっと多様化しているのが現実ではないでしょうか。先ほどの甲田先生のご発表になった調査は択一式でありまして、一つだけを選ぶものですから排他的な結果になり、こちらはマルチプル・アンサーですので多様化したという方法的な問題もありますが、必ずしも資格型、教養型というのは対立しない、もっと多様化していて、さまざまな見方ができるのではないかと思います。

そういったものの背後にあります、学歴観については、ほとんど差がありませんが、図表 1－2 によれば現代社会は「学歴重視ダ」と答えている人たちは、年齢別に見ますと、年齢が高いほど多いという結論が出ております。

それから、現実には放送大学の学生の方々がどのように勉強されているかということの一面を示しているのが次の図表でありまして、実際に受講している平均数は 5 コースです。これは年齢などによる差異がありますが、それほど大きな違いではありません。

図表 1－3 各種教材による学習状況

基本属性 調査項目 (N)	全 体 (1022)	年 齢 カ テ ゴ リ ー					学 歴		
		18~24 (122)	25~34 (255)	35~44 (351)	45~54 (229)	55~ (60)	高 卒 (723)	短大卒 (223)	大 卒 (65)
実際の受講科目数平均(N=1022) (単位：科目数)	5.01	5.23	4.88	4.97	4.98	5.35	4.97	5.13	5.09
実際の面接授業出席科目数平均(N=1022) (単位：科目数)	1.40	1.42	1.23	1.47	1.45	1.48	1.40	1.40	1.31
実際に通信指導を受けた割合(N=1022)	90.3	91.0	92.5	90.0	86.9	95.0	90.3	90.1	90.8
実際に単位認定試験を受けた割合(N=1016)	89.9	82.6	88.5	91.1	91.2	98.3	89.2	91.0	92.3

また、面接授業は平均 1.4 科目、通信指導は90%の方が受けています。実際に単位の認定試験を受けた割合もほぼ90%です。

これは放送大学の方でご公表になりました全数の数字とかなり違っておりました、高いのですが、これは我々が全科履修生を調査対象にしたものですから、それ以外の方々を全部含めた数値とはおのずから違って来るわけです。

それから、＜各種教材、授業に対する評価＞、オファーされている授業を学生の皆さんがどのように見ているかという点です。全体に、「ツイテイクノガ困難」という回答が2割から3割を占めているということがわかります。属性

図表 1－4 受講科目に対する総合評価・面接授業に対する評価

調査項目	基本属性 全 体	性 別		職 業 カ テ ゴ リ ー					
		男	女	専技管	事 務	技能他	臨 パート	自 営	主 婦
受講科目に対する総合的評価(N＝4864:被調査者の全受講科目数，以下同)									
1. ヤサシスギテ モノタリナイ	2.5	3.7	1.7	3.6	2.3	1.7	1.7	2.2	1.5
2. 十分ツイテ イ ケ タ	38.0	36.4	39.2	37.1	33.0	31.4	42.6	40.6	44.6
3. ドウニカツ イテイッタ	37.0	35.4	38.2	35.7	37.7	42.5	34.4	35.5	38.5
4. ツイテイク ノ ガ 困 難	22.5	24.5	20.9	23.6	27.1	24.4	21.3	21.7	15.4
困難を感じる理由(上問の副問であるが，％は全サンプルを分母にして算出) (3つまで選択)									
1. 分 量 ガ 多 ス ギ ル	10.6	9.5	11.4	8.2	8.6	11.1	10.5	11.6	11.4
2. テキストガ 難 シ イ	6.6	7.0	6.4	7.0	7.3	5.8	7.7	4.0	5.2
3. 放送授業ガ 難 シ イ	5.3	5.4	5.1	5.2	5.8	5.2	5.0	5.5	4.5
4. 興 味 ガ ワ カ ナ イ	4.8	4.0	5.5	5.2	5.2	5.2	3.6	2.4	5.1
5. 勉 強 ノ 時 間 ガ ナ イ	27.6	29.7	26.0	31.6	33.5	39.9	20.7	28.6	19.1
6. 進 ミ 方 ガ 速 ス ギ ル	10.2	10.3	10.1	9.9	9.8	11.3	11.2	9.1	8.4
7. 自分ノ学力 不 足	30.6	29.5	31.5	28.0	33.1	33.6	29.6	30.1	29.4
8. 各 教 材 ガ バ ラ バ ラ	2.1	2.9	1.6	1.9	1.5	4.8	3.0	0.9	1.1



図表 1 - 5 受講科目に対する総合評価・面接授業に対する評価

基本属性 調査項目	全 体	年 齢 カ テ ゴ リ ー					学 歴		
		18~24	25~34	35~44	45~54	55~	高 卒	短大卒	大 卒
受講科目に対する総合的評価(N＝4864:被調査者の全受講科目数, 以下同)									
1. ヤサシスギテ モノタリナイ	2.5	3.4	3.2	1.9	2.0	4.2	1.9	3.8	5.2
2. 十分ツイテ イ ケ タ	38.0	36.0	35.5	38.3	40.2	44.2	36.8	38.6	48.8
3. ドウニカツ イ テ イ ッ タ	37.0	34.7	36.9	38.4	37.0	31.8	37.7	37.4	27.9
4. ツイテイク ノ ガ 困 難	22.5	25.9	24.5	21.4	20.7	19.8	23.7	20.2	18.2
困難を感じる理由(上問の副問であるが, %は全サンプルを分母にして算出) (3つまで選択)									
1. 分 量 ガ 多 ス ギ ル	10.6	12.2	10.4	11.0	9.9	8.7	10.7	10.1	11.2
2. テキストガ 難 シ イ	6.6	8.5	8.0	5.9	5.2	7.8	7.1	5.8	4.8
3. 放送授業ガ 難 シ イ	5.3	7.4	5.3	4.4	4.6	8.1	5.8	4.8	2.1
4. 興 味 ガ ワ カ ナ イ	4.8	7.8	5.9	4.0	3.9	2.8	4.7	6.0	2.7
5. 勉 強 ノ 時間ガナイ	27.6	21.0	30.2	30.5	26.8	16.5	27.8	28.7	19.9
6. 進ミ方ガ 速 ス ギ ル	10.2	12.1	10.2	10.5	9.6	6.5	10.8	8.5	9.1
7. 自 分 ノ 学 力 不 足	30.6	31.5	31.8	30.2	31.1	25.9	32.1	28.4	20.2
8. 各 教 材 ガバラバラ	2.1	2.7	3.0	1.7	1.4	3.4	2.6	1.0	1.8

による差異を見ると、年齢による差異が大きいのですが、職業カテゴリー別に見ますと、主婦層が15.4%で一番少ないということがわかります。

そういうようなかなり強い有意差がどこから出てくるのかというのはおもしろい問題なんです。同じ図表の下の部分を見ていただきますと、そういった困難をなぜ感じるのかという問いに対する一つの答えが出ております。

その中で5の「勉強ノ時間ガナイ」と答えているところを職業カテゴリーで見ますと、専門・技術・管理職のところから、31.6, 33.5, と続き主婦のところでは19.1%。臨時・パートという、主婦がかなりの部分を占めるものも入れ

ますと、20.7%でありますから、時間的余裕がついていけるか否かに関係があるということがわかるわけです。さしあたってこの資料から読めますことは、放送大学の授業についていくということの最大の条件は、時間的余裕があるかどうかということにかかっているのではないかということです。

次に通信指導と単位認定試験に対する評価についてですが、表を見ていただきますと、3.の「コメントが励ミニナツタ」とか、7.の「コメントが足リナイ」というところで、通信指導というものに対する一つの期待、先生と触れ合う、先生の肉筆がそこに書かれているというものに対する期待が、かなり高いということがわかります。そういうものが1., 2.の高い数字に反映しているんだと思います。概して通信指導というのは評価が高いということが、この数字からいえると思います。

そのすぐ下にある小さな表が単位認定試験に対する評価ですが、これを見ますと、18歳から24歳のところでは「短カカッタ」と答える人がほんのわずかであるのに対して、55歳以上の方になりますと4分の1以上が「短カカッタ」と答えている。

図表1-6 通信指導に対する評価

基本属性 調査項目 (N)	全 体	年 齢 カ テ ゴ リ ー					学 歴		
	(1022)	18~24 (122)	25~34 (255)	35~44 (351)	45~54 (229)	55~ (60)	高 卒 (723)	短大卒 (223)	大 卒 (65)
通信指導に対する評価(2肢選択)(N=923)									
1. 学習ノテガ カリヲエタ	51.1	37.7	52.9	57.0	45.9	56.7	50.3	56.5	43.1
2. 授業ノ理解 タスケタ	34.8	36.1	34.9	31.1	36.2	50.0	33.5	35.9	47.7
3. コメントガ 励ミニナツタ	13.8	12.3	9.4	11.4	21.4	20.0	15.1	9.4	10.8
4. 課 題 ガ 難シスギタ	15.9	23.8	12.5	17.7	15.3	6.7	17.6	13.9	6.2
5. 課 題 ガ 易シスギタ	3.3	4.1	3.5	2.8	2.6	5.0	2.9	4.0	4.6
6. 授業トノ 関連ウスイ	3.1	6.6	3.9	2.0	1.7	3.3	3.3	2.2	3.1
7. コメントガ 足 リ ナイ	28.2	27.0	36.1	29.9	20.1	21.7	28.6	25.1	32.3

図表 1-7 単位認定試験に対する評価

基本属性 調査項目 (N)	全 体	年 齢 カ テ ゴ リ ー					学 歴		
	(1022)	18~24 (122)	25~34 (255)	35~44 (351)	45~54 (229)	55~ (60)	高 卒 (723)	短大卒 (223)	大 卒 (65)
単位認定試験の試験時間に対する評価(抜粋)(N=901)									
短カクタ	17.2	6.0	15.8	18.0	20.2	25.9	17.0	14.7	24.1
単位認定試験の難易度に対する評価(抜粋)(N=884)									
難シカタ	48.8	44.3	47.7	52.1	48.5	40.7	51.0	45.1	36.2

図表 1-8 放送メディアに対する評価

基本属性 調査項目 (N)	全 体	性 別		職 業 カ テ ゴ リ ー					
	(1022)	男 (439)	女 (583)	専技管 (260)	事 務 (156)	技能他 (102)	臨パート (86)	自 営 (69)	主 婦 (215)
テレビとラジオのどちらが学びやすいか(N=1013)									
1. T V ノ ハウガヨイ	68.8	69.4	68.3	74.0	72.9	69.3	65.5	53.6	64.3
2. ラ ジ オ ノ ハウガヨイ	10.4	9.7	10.9	6.2	11.6	12.9	11.9	18.8	11.7
3. ドチラトモ イエナイ	20.8	20.9	20.8	19.8	15.5	17.8	22.6	27.5	23.9

今度は逆に「難シカタ」か「ヤサシカタ」という答えになりますと、若い人は、「難シカタ」と答えている人は44.3%ですが、「難シカタ」と答えている人が一番少ないのが、先ほど「短カクタ」というのが一番多かった55歳以上の方ということです。

この辺からいえますことは、できるできないとか、学習についていけるとかついていけないとかいう以前に、年齢によって学習のリズムというものがあるのではないかと思うわけです。したがって年齢によるリズムの差というものを考慮した学習形態とかテストイングとか、そういうものを一つ考えていかなければいけないんじゃないか。ここの辺は非常におもしろい結果であるというふうに私は見ております。

それから、＜放送メディアに対する評価＞です。端的に言ってテレビとラジオのどちらが学びやすいかということですが、全体的なところだけごらんにな

っていただければ、ほぼ70%の方が「TVノハウガヨイ」と答えておられるのがわかると思います。ただ、自営業者では半分の方しかテレビを好んでいっ  
しゃらない。この辺は営業形態などが関係しているものと思われます。

では放送大学の学生さんたちはどういう形で自宅で勉強されているかを見て  
みましょう。

図表1-9, 1-10に番組視聴以外にどれだけ勉強しているか、自習をして  
いるかについて、ブレイクダウンで平均値を出しておきました。単位は分です  
が、これを見ますと、職業カテゴリーでは自営業者と主婦、年齢カテゴリーで  
は55歳以上の方ほど学習時間が長いということがわかります。

図表1-9 学習時間とその時間帯(1)

調査項目	基本属性 (N)	全 体	全 体		職 業 カ テ ゴ リ ー					
	(1022)	男 (439)	女 (583)	専技管 (260)	事 務 (156)	技能他 (102)	臨パート (86)	自 営 (69)	主 婦 (215)	
番組視聴以外の放送大学のための平均学習時間(N＝1021) (単位：分)										
	58	59	57	48	48	54	52	74	70	
番組視聴以外の放送大学のための学習時間帯（複数選択）(N＝942)										
1. 6～ 9 時	13.7	16.9	11.3	18.8	15.2	10.6	14.1	16.4	10.1	
2. 9～12 時	24.0	16.4	29.7	8.1	5.3	11.7	29.5	34.4	51.2	
3. 12～15 時	18.9	10.9	24.9	8.5	5.3	7.4	23.1	21.3	42.0	
4. 15～18 時	12.1	9.7	13.9	6.0	2.6	5.3	19.2	21.3	20.3	
5. 18～21 時	17.6	24.1	12.7	24.4	23.8	16.1	15.4	14.8	7.3	
6. 21～ 0 時	67.3	69.4	65.9	72.2	83.4	76.6	55.1	60.0	58.7	
7. 0～ 3 時	10.5	13.5	8.4	14.2	6.0	16.0	12.8	11.5	4.4	
8. 3～ 6 時	5.0	5.2	4.7	3.9	4.6	6.4	6.4	8.2	3.9	

それから、学習の時間帯は職業的特性が非常に強くて、主婦であれば食事時  
間に少なくなって日中多いとか、勤め人であれば夜の9～12時の間に集中する  
とか、そういう傾向が出ております。これは一つの重要な情報ではないかと思

います。

図表 1-10 学習時間とその時間帯(2)

基本属性 調査項目 (N)	全 体	年 齢 カ テ ゴ リ ー					学 歴		
	(1022)	18-24 (122)	25-34 (255)	35-44 (351)	45-54 (229)	55~ (60)	高 卒 (723)	短大卒 (223)	大 卒 (65)
番組視聴以外の放送大学のための平均学習時間(N=1021) (単位：分)									
	58	47	48	59	64	94	59	53	50
番組視聴以外の放送大学のための学習時間帯（複数選択）(N=942)									
1. 6～9時	13.7	9.9	10.2	13.4	17.2	22.8	13.6	13.4	16.1
2. 9～12時	24.0	17.1	15.9	28.7	26.3	31.6	23.4	26.9	23.2
3. 12～15時	18.9	11.7	15.0	20.3	26.8	10.5	19.3	17.9	17.9
4. 15～18時	12.1	8.1	12.4	13.7	10.0	17.5	11.6	14.4	10.7
5. 18～21時	17.6	25.2	17.4	13.7	14.8	36.8	17.2	14.4	30.4
6. 21～0時	67.3	64.0	76.3	71.0	58.9	47.4	69.1	63.7	58.9
7. 0～3時	10.5	22.5	16.4	6.0	6.7	5.3	10.7	10.5	7.1
8. 3～6時	5.0	4.5	2.7	4.8	7.7	7.0	4.9	6.0	1.8

次に参考書籍の購入状況ですけれども、平均して3冊ぐらゐの書籍を購入されています。その平均購入金額は4,433円と出ておりますが、これもカテゴリーによって非常に差がありまして、年齢で見ますと、高齢の方ほどたくさん本を、しかも高い金額を出して買っているということがわかります。

図表 1-11 参考書籍購入状況(1)

基本属性 調査項目 (N)	全 体	性 別		職 業 カ テ ゴ リ ー					
	(1022)	男 (439)	女 (583)	専技管 (260)	事 務 (156)	技能他 (102)	臨パート (86)	自営 (69)	主婦 (215)
参考書籍の平均購入冊数 (N=1017) (単位：冊)									
	3.06	3.45	2.76	3.01	2.95	3.44	2.47	3.64	2.96
参考書籍の平均購入金額 (N=1017) (単位：円)									
	4433	5590	3545	4771	4317	5234	3172	7339	3451

図表 1-12 参考書籍購入状況(2)

基本属性 調査項目 (N)	全 体	年 齢 カ テ ゴ リ ー					学 歴		
	(1022)	18~24 (122)	25~34 (255)	35~44 (351)	45~54 (229)	55~ (60)	高 卒 (723)	短大卒 (223)	大 卒 (65)
参考書籍の平均購入冊数 (N=1017) (単位:冊)	3.06	2.26	2.73	2.92	3.55	5.08	3.07	3.19	2.57
参考書籍の平均購入金額 (N=1017) (単位:円)	4433	3008	3780	3966	5578	8472	4301	4786	4742

学歴で見ますと、高卒、短大の方ほど書籍の平均購入数が多いんですけども、大卒の方は金額が張っている、つまり一冊当たりの単価の高い本を買っております。

それから、＜自宅での勉強場所・家族の協力＞ですけれども、これも最も端的に出ますのは、主婦か、そうでないかということで、性別を見ていただきますと、男女で全然違います。「自分ノ部屋ガアル」というのは男子の方がずっと多いんですが、「居間ヤ台所」で勉強しているという方になりますと、女子が50%以上ということになります。年齢カテゴリーで見ましても、18才から34才の伝統的な学生層とオーバーラップする層では82%が自分の部屋がある。それ以外の方は自分の部屋がなくて、そういう意味では厳しい学習状況に置かれているといえます。

図表 1-13 自宅での勉強場所

基本属性 調査項目 (N)	全 体	性 別		年 齢 カ テ ゴ リ ー				
	(1022)	男 (439)	女 (583)	18~24 (122)	25~34 (255)	35~44 (351)	45~54 (229)	55~ (60)
自宅での勉強場所 (N=1017)								
1. 自分ノ部屋ガアル	42.6	57.5	33.1	82.0	48.6	29.6	31.4	55.0
2. 子供部屋ヲ使ウ	2.7	2.3	2.9	1.6	1.2	5.4	1.3	0.0
3. ドウニカ空間ヲホカク	5.5	6.0	5.2	1.6	5.9	7.7	4.4	3.3
4. 居間ヤ台所	42.5	25.3	55.4	9.0	37.2	51.6	54.4	33.3
5. ソノタ	6.8	9.0	5.2	5.7	7.1	5.7	8.4	8.3

図表 1-14 家族の協力

調査項目 \ 基本属性 (N)	全 体	性 別		年 齢 カ テ ゴ リ ー				
	(1022)	男 (439)	女 (583)	18-24 (122)	25-34 (255)	35-44 (351)	45-54 (229)	55- (60)
入学して1学期が経過したが、家族は…… (N=979)								
1. トテモ協力的	32.0	32.2	31.9	20.7	33.8	30.5	34.2	46.6
2. マア協力的	49.5	47.1	51.2	52.6	43.8	51.8	53.6	43.1
3. ドチラトモイエナイ	13.8	16.1	12.1	22.4	17.9	12.4	6.8	10.3
4. ヤヤ非協力的	1.7	1.0	2.3	2.6	1.3	2.7	0.9	0.0
5. トテモ非協力的	1.0	1.0	1.1	0.0	0.8	1.8	0.9	0.0
6. 入学ヲ知ラナイ	1.9	2.6	1.4	1.7	2.5	0.9	3.6	0.0

それから、家族の協力状態ですが、かなり協力的に温かく見守られているということがわかんと思います。

最後に、そういった学習者が、一学期を経過してどのように自分の勉強ぶりを反省し、また、大学に対して何を期待しているか、何を評価しているかということを書いてみました。自己の評価に対しては、「ヨク勉強シタト思ウ」という回答は余り返ってきておりませんが、それでも、これも年齢別に見ますと非常におもしろくて、若い人は「ヨク勉強シタト思ウ」と答えている人は33%と、ごくわずかです。年とともにそれが上がってまいりまして、55歳以上の方は36.7%が、自分なりによく勉強したと答えております。

図表 1-15 学習者の反省

調査項目 \ 基本属性 (N)	全 体	年 カ テ ゴ リ ー					学 歴		
	(1022)	18-24 (122)	25-34 (255)	35-44 (351)	45-54 (229)	55- (60)	高 卒 (723)	短大卒 (223)	大 卒 (65)
1学期の学習状況の自己評価 (N=1020)									
1. ヨク勉強シタト思ウ	14.5	3.3	8.6	16.5	21.1	26.7	14.7	13.0	16.9
2. フツウダト思	27.4	23.8	23.9	27.4	30.4	38.3	27.5	27.8	26.2
3. 不勉強ダ	58.1	73.0	67.5	56.1	48.5	35.0	57.8	59.2	56.9

図表 1-16 卒業予定と今後の学習計画

調査項目	基本属性 (N)	全 体	性 別		年 齢 カ テ ゴ リ ー				
		(1022)	男 (439)	女 (583)	18-24 (122)	25-34 (255)	35-44 (351)	45-54 (229)	55- (60)
卒業までに要する年数の予想値平均 (N=1016) (単位：年)									
		5.88	5.72	5.97	4.91	5.86	6.01	6.21	5.76
今後の履修計画 (N=1018)									
1. 登録単位ヲ増ヤス		6.0	7.1	5.2	13.1	5.9	6.3	1.8	6.7
2. 1学期ト同ジペース		43.0	44.1	42.3	45.9	39.6	41.1	46.1	51.7
3. 登録単位ヲ減ラス		47.2	44.8	48.8	31.1	52.5	48.9	48.7	40.0
4. シバラク休モウト思 ウ		1.6	1.4	1.7	4.1	0.8	1.4	1.8	0.0
5. ソ        ノ        タ		2.3	2.5	2.1	5.7	1.2	2.3	1.8	1.7

それから、卒業予定、今後どのような形で、何年ぐらいかけて卒業するか、今後学習をどのように進めていくかということですが、全体としては大体6年弱という予想年数を答えていらっしゃいます。若い方ほど高いというのは、若い人がせっかちなのか、それとも学習に向いているのかわかりませんが、お年の方ほどじっくり学習に取り組むという姿勢が見られます。

それから、今後の履修計画ですが、注目していただきたいのは3の「登録単位ヲ減ラス」というところです。一学期はちょっと飛ばし過ぎた、5単位というのはちょっと多かったからもっと少なくとか、10単位とったけれども無理だったという人がかなり多くて、最も多いところが「登録単位ヲ減ラス」、そしてじっくり取り組むというところでした。これも今後の方向に大きな示唆を与えてくれるのではないかと思います。

最後に＜放送大学に対する総合的満足度＞ですが、これは全体に「期待以上ダッタ」、もしくは「期待通りダッタ」という回答が多かったということは指摘しておかなければいけないと思います。全体として「期待以上ダッタ」、「期待通りダッタ」を合わせると約85%の水準に達しますので、かなりの程度満足していただいているということがわかります。



図表 1 - 17 放送大学に対する総合的満足度

基本属性 調査項目 (N)	全 体	年 齢 カ テ ゴ リ ー					学 歴		
	(1022)	18-24 (122)	25-34 (255)	35-44 (351)	45-54 (229)	55- (60)	高 卒 (723)	短大卒 (223)	大 卒 ( 65)
放送大学に対する総合的満足度 (N=1003)									
1. 期 待 以 上 ダ ッ タ	21.2	15.8	18.5	22.7	25.7	18.3	21.4	21.6	16.9
2. 期 待 通 り ダ ッ タ	63.2	61.7	65.3	65.5	57.2	65.0	63.2	65.6	55.4
3. 期待ハズレ ダ ッ タ	15.6	22.5	16.1	11.8	17.1	16.7	15.4	12.8	27.7

ただし、「期待ハズレダッタ」という回答も、たとえ1，2割程度ではあったとしてもということは注目すべき点でありまして、期待外れだったという人に対しては、なぜ期待外れでしたかという質問を自由記述でしてあります。それについては後ほど塩崎さんの方から内容分析の形で分析していただきます。

私の発表は以上でございます。

## 視聴状況調査

○柴山 次に、放送授業の視聴状況についてご説明申し上げます。

### 1. 放送授業の視聴特性について

#### (1) 視聴状況を考えるに当たって

視聴状況調査は学習指導の面で非常に参考になるということに加え、放送の編成についても重要であるということで調べております。

一般に視聴率といいますのは、テレビやラジオの設置台数に対する割合ですが、ここでは学生の割合ということであり、一般の放送で使われている概念とは多少違います。

そこで、この場合の、視聴率は一体どの程度になるものかと、計算しましたところ、普通、全科履修生が一学期に平均してとる科目数、5科目ありますけれども、四単位科目、つまり45分授業を週二回繰り返すもの一つと、二単位科目を四つとったとすると、視聴率は1.79%にしかないということです。で

すから、一般でいう視聴率とは大きさは随分違って来るかと思います。

〔プロジェクター映写〕

## (2) 視聴率の時間的推移

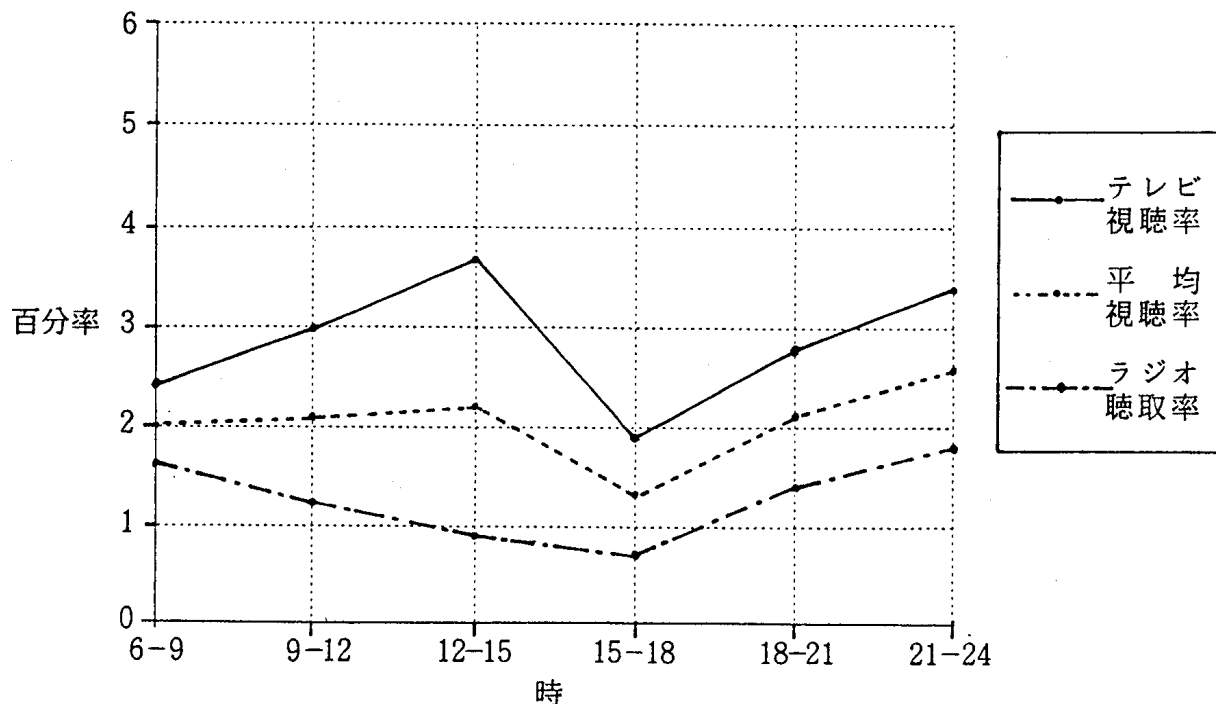
これはグラフにとったものであり、縦は、学生の割合を表わしています。木曜日、青い線はテレビで、約2%台から始まりまして急に高くなる。赤い方はラジオで、5%以上から急に下がって、後ずっと低迷するという傾向が出ております。

これは、その科目が人気があるとかいいとかというものをあらわしているのではありません。登録者が多いところはやはり多いということです。テレビですと9時台とか、1時から3時ごろにかけて極めて高いということがありますけれども、例えば英語のようなもの、それから、9時ですと「日本文化論」といった比較的受講者の多い科目が多いものですから、こういうふうになっている。ですから、これは決してミクロに見てはいけないという例だと思います。

## (3) 時間帯と視聴状況

次に、一週間全部平均して科目の間の差をなくすように平均をとってみました。テレビでは6時台、約2%強ありますが、それからだんだん伸びていきまして、12時から15時台が高い。それから、15時から18時台に落ち込みまして、

図表 2-1 放送授業視聴状況（時間帯による変化）

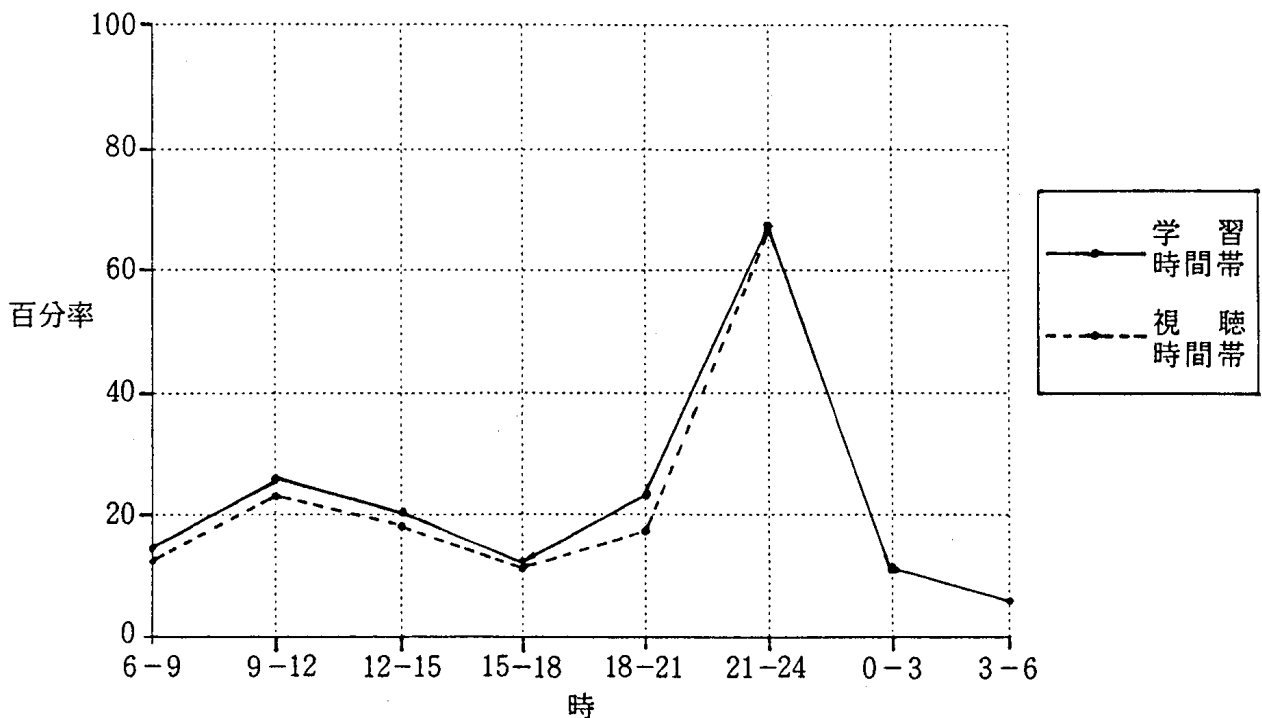


また伸びていくということです。ラジオはどうかといいますと、逆に朝方は高い。そしてだんだん下がって行って、15時から18時台で下がってしまう。そして21時から24時台に上がっていくということです。そして、15時から18時台はやや下がり、21時から24時台は高いということです。

12時から15時台がなぜいいかといいますと、どうもこれはそこに流されている番組の影響が強いのではないかと思います。ちなみに、ここは英語の科目が週3回ございました。それが非常に高い視聴率を上げております。それで、12時から15時台というのは高いように見えるが、実際はそれほどでもないという感じです。

それから、先ほど岩永先生がお調べになりました調査の一つにあるんですけども、学生は一体どの時間帯を望むかということをとってあります。点線

図表2-2 学生希望時間帯（学生調査）



が学習時間帯、太い線が視聴時間帯ですが、この二つの線は極めて接近しております。したがって、学習といっても、特に放送で学習するのか、あるいは自分で印刷教材を見るのか、参考書を見るのかといった区別は学生は意識していないということです。

それからもう一つの特徴は、朝方は6時から9時台は高くないが、9時から

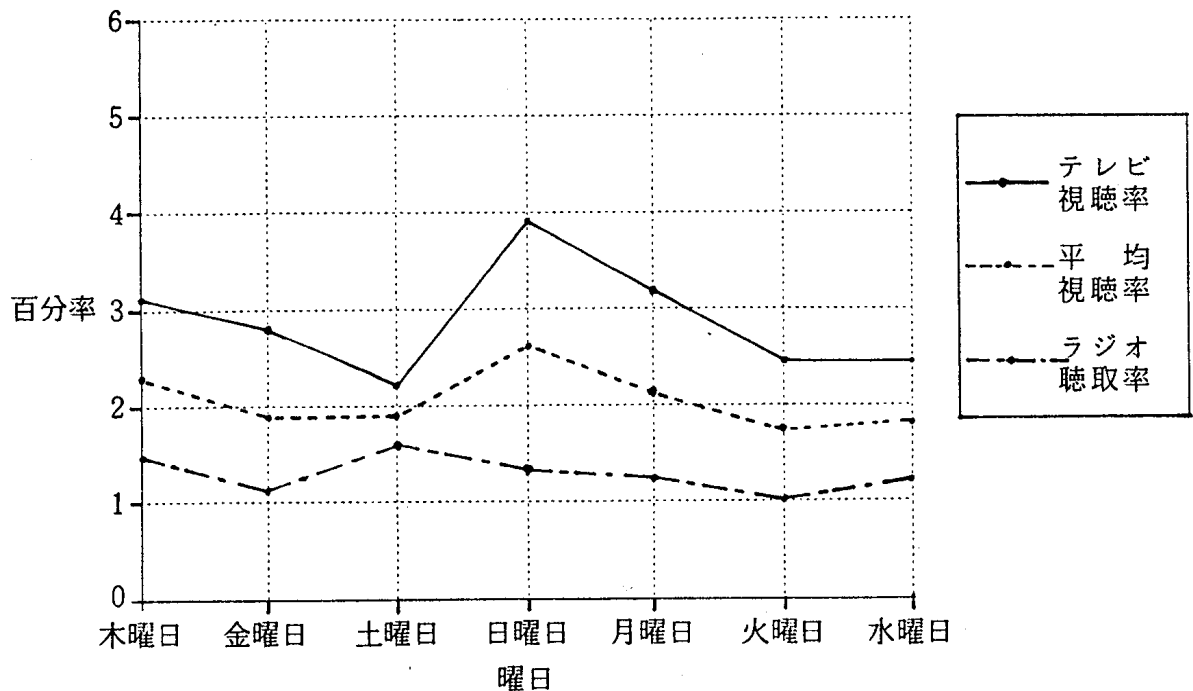
12時台は高い。それから下がり始めて、15時から18時台が低い。それからもう一つ、21時から24時台の数値は極めて高いということです。あとは、深夜の午前零時から明け方6時までには低いという結果になっております。

この二つの点から考えましても、学生は一応希望に従って放送科目を選んでやっているのではないと思いますか。ただし数値はかなり違いますから、深夜にものすごく受講生の多いものを持てきますと一致するでしょうが。

#### (4) メディアによる比較

次に曜日による変化です。放送大学の第二学期は、木曜日が初日となっております。したがって、木曜日が第一日となります、テレビは木・金・土と

図表 2-3 放送授業視聴状況（曜日による変化）



下がり、日曜日に関わり高くなってから、月、火、水と下がっております。テレビの特徴は、土曜日が下がっていること、日曜日が高いという傾向です。

それに対しまして、ラジオはどうか……。ラジオは数値が半分ぐらいですけども、木曜日から始まりまして、逆に土曜日が高くなっている。それから徐々に下がり、ほぼ横ばいということです。

これからいえますことは、テレビの方が変動が激しいということ。それから、一週間に二つの周期みたいなものがありまして、前半と後半で上がって下がる

をくりかえすということです。ラジオはそんな極端には出ておりません。

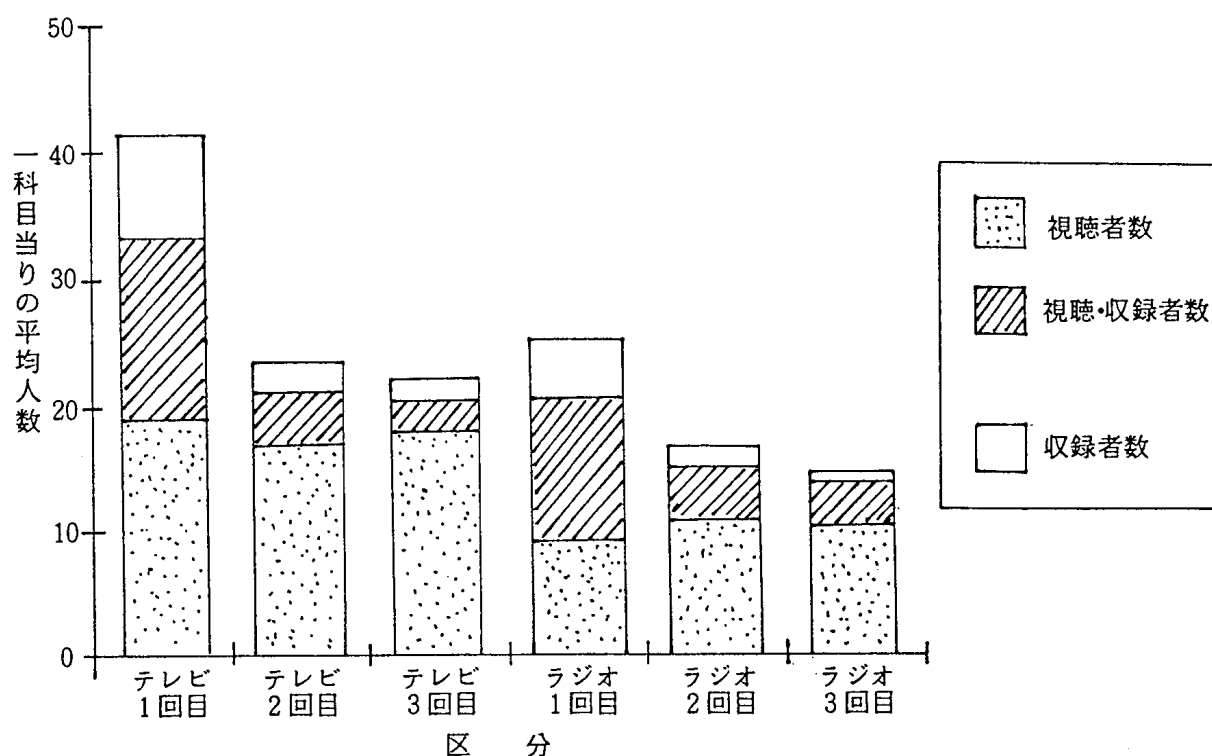
それから、土曜日と日曜日の問題があるかと思います。テレビの方はどちらかという、日曜日に受講生の多い科目が一般的にやられている、土曜日はそれがないのではないかと。ラジオの方はどちらかという、土曜日がよくて、日曜日はそれほどでもないという傾向が出ております。

それから、ほかに考えられます要因は、面接授業ということがあります。土曜、日曜はほぼ一日じゅう面接授業がございます。ですから、その影響もあるかもしれません。

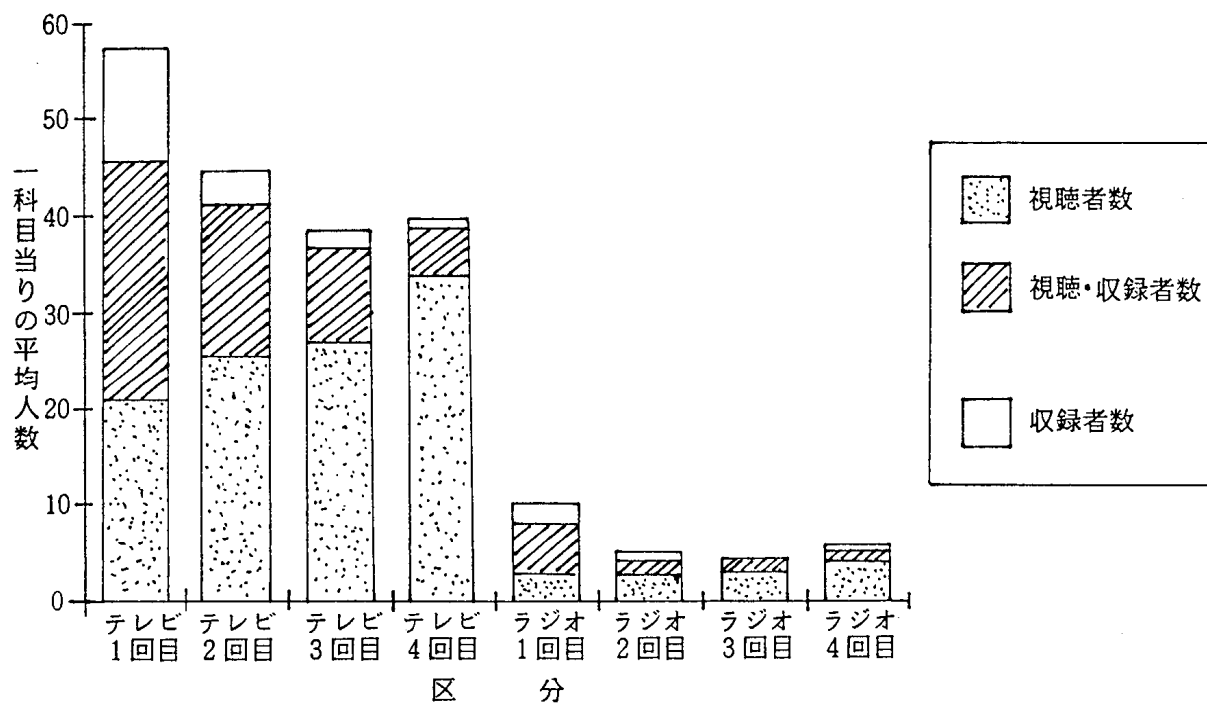
## 2. 放送回数と視聴状況について

### (1) 放送回数と視聴状況

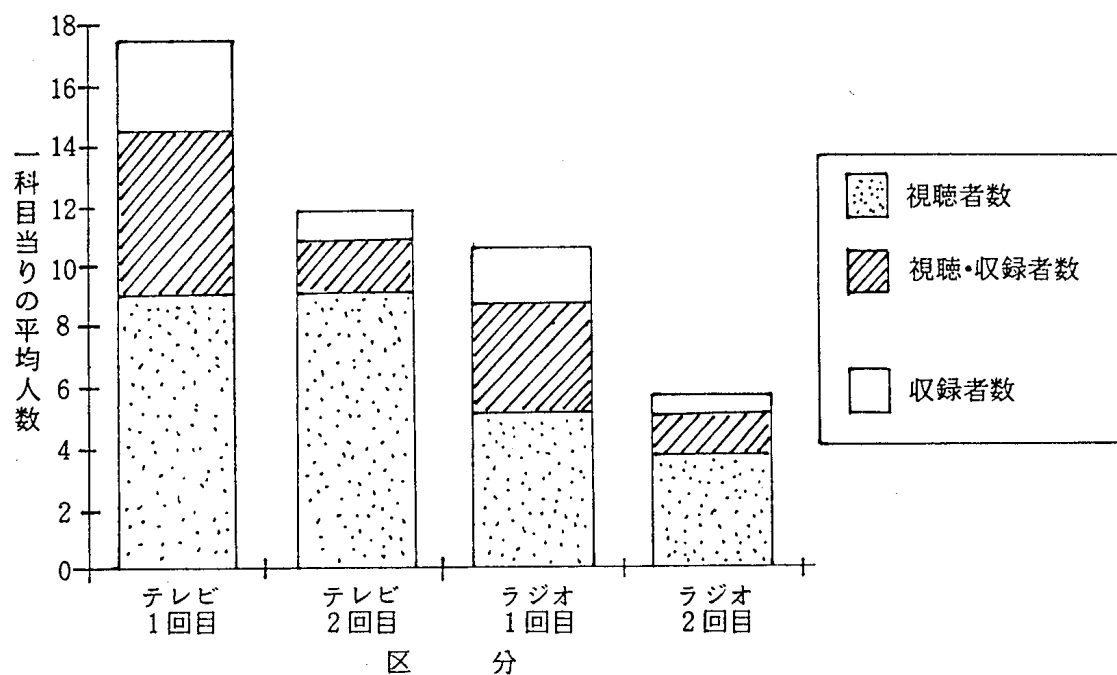
図表 2 - 4 基本基礎科目の視聴状況



図表 2 - 5 外国語科目の視聴状況



図表 2 - 6 専門科目の視聴状況



科目の分類に、基本基礎科目、外国語、専門科目の三つがございます。ここでは単に、再放送を含めて何回放送するかということを考えまして、分けております。例えば再放送を含めて3回繰り返す基本基礎科目につきましては、テレビで行われている科目は第一回目に数が多く、640人に対しまして全科目平均しまして40人ちょっと、率にしますと10%以下ですけれども、これくらいの人が見ている。

ここで、黒い部分と上の斜線まで入れた、30人強が視聴者です。20%のところから上までが、ビデオを収録した人の数です。間は両方ということです。

視聴者は一回目は確かに多く、二回目、三回目は少ないです。ただし、確かに下がりますけれども、決して極端に減ち込んでない、半数よりやや上のあたりでとまっているということがいえます。

## (2) 放送授業の視聴と収録

一方、収録者についてはどうか……。一回目は極めて多いです。二回目、三回目は減る傾向にあります。それから、一回目と二回目の差は非常に大きいです。これは基本基礎科目以外の外国語（再放送を含めて4回行われているもの）それから、専門科目（再放送を含めて週二回行われているもの）この三者をとりにしても同じような傾向がございます。ですから、番組を一体何回繰り返して行うのが適当かということにつきましては、二回目、三回目の傾向は余り変わらないと考えていただければ分かることかと思えます。

## 3. ま と め

### (1) 放送と学習

最後に結論を申し上げますけれども、このような状況から、放送と学習ということについてもう少し考えてみないといけないということがあります。学生は放送時間と学習を大体オーバーラップして考えている。一方、放送大学の建前といたしまして、放送時間何分、それから、参考書やなにかを使ってやる時間が何分という決め方をされています。実態の方を見ますと、どうもそうでもない、やはり放送を中心に学習が行われているのではないかということです。

なお、これを裏づけるものとしたしまして、岩永先生の調査にもあったんで

すけれども、自分で一日何時間勉強しましたかという質問に対して、視聴時間以外に何分かというところを見ますと、60分程度が多かったということです。で、放送の時間と放送以外で学習している時間のことを考えますと、やはり放送中心であるということです。

## (2) 収録機器を利用した学習方法

これだけ収録が頻繁に行われますと、普通のテレビ・ラジオの学習とは違うのではないかとことがあります。したがって、放送されている時間に学習するというのではなくて、録音・録画して学習するという方法をもう少し研究する必要があるのではないかと。録音・録画をきちんと行うように指導するのかどうなのか。放送時間をもう少し考えてみてはどうか。現在、6時から24時まで行われておりますけれども、学生の希望どおりにはいかないですが、例えば科目によって放送時間帯は置きかえていいものか。それから、放送されていない零時から明け方までは放送してもよいかといった問題はあるかと思えます。ただ、視聴状況がこうであるからこうするべきであるというのは必ずしも当たっていないと思えますけれども、一つの問題提起にはなったかと思えます。

## 学 生 の 声

○塩崎 それでは、今回の調査におきます自由記述に見る学生の声について、発表させていただきます。資料の3.「放送大学への期待と要望」という資料と、一枚になっておりますグラフ、これは学生の声の内容分析して図式化したものです。このチャートをもとに、お話を進めてみたいと思えます。

まず最初にお断りしておかなければなりませんが、これは学生が放送大学に対してどのような意見、感想を持っているか、その調査票の中で自由記述の回答欄が幾つかあります。その部分だけを全部抜き出して、分類して分析したものです、したがって、学生の生の声が出ております。生の声ですので、当然主観的になることは否めないわけです。

また、調査の性格上、主として、満足していない部分についての声が上がってきております。具体的には、先ほど岩永さんからのお話がありましたように、85%近くの学生が放送大学に、期待どおりである、期待以上である、満足して

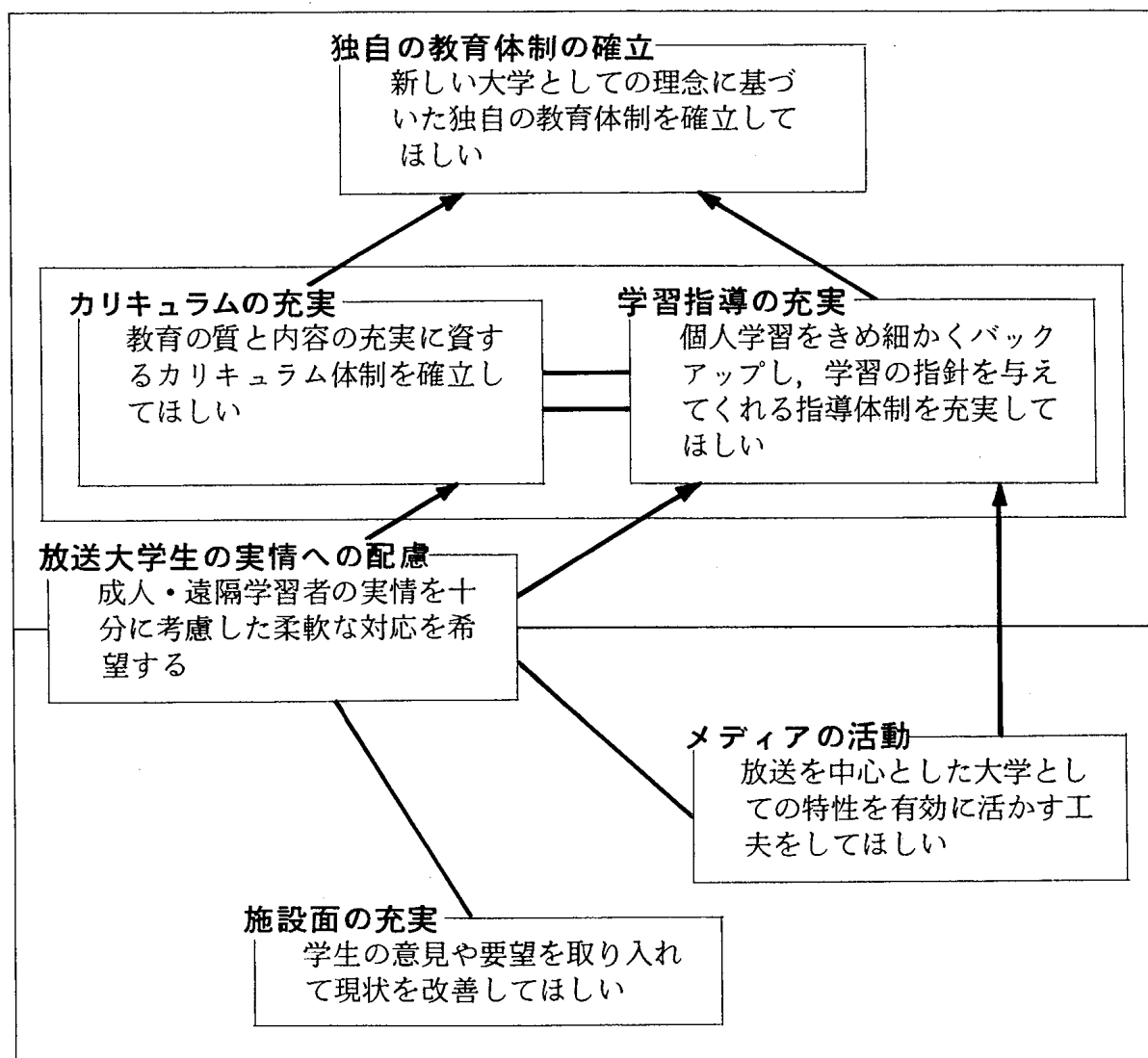


いる旨をあらわしていますが、満足していない部分が主に自由記述の声として上がってきていることをお断りしておきたいと思います。

ただし、やはり生の声ですから、放送大学の学生のさまざまな特徴を非常にはっきりと反映しております。

チャートをご説明させていただきます。まず、チャートの左の下をごらんになっていただきたいんですが、放送大学生の実情への配慮、つまり、ディスタント・ラーナーズである、それからまたライフロング・ラーナーズである、主に大人である、そうした実情に対する配慮が欲しいという意見があります。

## 放送大学の教育体制



それと関連して、放送大学の一つの大きな特徴でありますメディアの活用、ディスタント・エデュケーションにおけるメディアの活用の問題が右の下に出ています。

それから、左の上にいきまして、放送大学生の特殊な実情に見合ったカリキュラム、また、新しい大学としての放送大学のカリキュラムに対する要望の声、それと非常に密接に関連した学習指導者のあり方、サービスシステムに関する問題があります。

それから、全部を統合する形で放送大学としての独自の教育体制、新しい大学としての体制のあり方、そういう意見等に分類することができます。

〔プロジェクター映写〕

## 1. 放送大学生の実情への配慮

いま、スライドでお見せしておりますのは、具体的な生の声で主に特徴の際立っているもの、それからまた、数の上で随分たくさん出てきたものを抜粋したものです。

まず放送大学生の実情への配慮から参ります。成人・遠隔学習者の実情を十分に考慮した柔軟な対応を希望する。これは遠隔教育、しかも、大人を対象にしているという放送大学の特徴を非常に良くあらわしている意見ですが、一番多かったのは、多くの人が働いていることから先ほどのダーさんのお話にもありましたように、時間的な拘束に関する要望でした。時間的な拘束を受ける学習者が、柔軟な学習体制を望んでいる。具体的には、試験日とか面接授業の時間、それから、番組の放送時間等です。時間に柔軟性を持たせてほしい、週末や夜間の放送なり試験なり面接授業をふやしてほしいという声が、とても多くでております。

なかでも際立っているのは、二番目にありますように、試験日の制約により、希望する科目が選択できないという意見です。先ほどの面接授業の選択にもありましたように、その科目選択が必ずしも本人の学びたい科目ではなく、時間的な都合に拘束されているという実情がでております。

## 2. メディアの活用

次に、二番目のメディアの活用に参加します。放送を中心とした大学としての特性を有効に生かす工夫をしてほしい。これにはたくさんの意見がありますけれども、集約しますと、一つは、メディアを活用するということは何であるかという、テレビ・ラジオでの教授法にかかわる問題です。一番多かったのが、印刷教材の棒読みはやめてほしいという意見で、これは圧倒的でした。

また、従来の大学のテキスト以上の、つまり放送メディアと抱き合わせの印刷教材にふさわしいテキストとして、その記述方式に改善と工夫が欲しい……。並びに補助教材に対する要望です。放送大学ではアメリカなどちがって補助教材は余り使われていないのですが、その補助教材を求める声がとても多くあがっております。

このメディアの活用に関しましては、ちょっと宣伝になりますが、印刷教材のあり方問題、またテレビ・ラジオによる放送番組の問題につきまして明日、セッションがありますので、どうぞご参加いただきたいと思います。

### 3. カリキュラムの充実

次に、三番目のカリキュラムの充実に参加します。教育の質と内容の充実に資するカリキュラム体制を確立してほしい。これは一言でいいますと、オープンユニバーシティとしてのうたい文句、つまり、オープンである新しい大学としての特性、それに対応した新しいカリキュラムのあり方、その辺の工夫を求める声が多く出ております。

個々の例になりますが、一つには学期制の問題があります。学期の枠を取り外してほしいとか、三学期制が忙し過ぎる……。どうも学生の事情と三学期制のあり方にかなりギャップがあるという意見が多く、いまのあり方ではスケジュールがきついという事情が随分出ております。

それから、登録方法に関してですが、登録時期が現在のままですと、前学期の試験結果 — 自分が合格したかしないかわかる前に次の学期の登録をしなければいけないようなシステムになっておりまして、それが非常に不都合であり、学習のプランを立てる上でネックになっている、そういう意見が出ております。そして、新しいカリキュラムのあり方を求める声が多く出ております。

#### 4. 学習指導の充実

それから、学習指導の充実を求める声があります。個人学習をきめ細かくバックアップし、学習の指針を与えてくれる指導体制を充実してほしい。これはやはり、遠隔学習者であり、しかも、中には学習の場から長い間離れていた成人が多く含まれている、そういう事情に見合った学習指導を求めています。

その具体的な例ですけれども、質問応答の方法をもっと簡便に、たやすくできるようにしてほしいとか、それから、通信指導、試験問題等をきちんと添削、アドバイス、そして返送してほしい、など、インターアクション、つまりディスタンスを埋めるための手だて、指導を求めています。

それから、面接授業が行われておりますが、面接授業が一方的な授業ではなく、やはりそこに学習指導の体制を組み込んでほしいという意見も随分でておりました。

#### 5. 施設面の充実

施設面の充実に関する要望は、数も多いですし、アクセスの確保という意味で、順次対応していくべき問題点がたくさんでております。一番基本となるのが学生同士、また、学生と教師の交流、インターアクションの行えるような設備、施設、機会等を充実してほしいという声でした。換言すれば、キャンパスライフを求めているということがいえます。

#### 6. 独自の教育体制の確立

これらの意見をもっと大きな概念でまとめてみますと、一番上にあります「独自の教育体制の確立」に対する意見になります。放送大学で何を学ぶかについては、先ほど岩永さんの発表にもありましたように、教養志向と、単位や学位取得志向とに、意見が二極化する傾向がかなり見られますが、さらによく見てみますと、それにとどまらず、さらに大きな意味での新しい放送大学、ハイヤーエデュケーションの新しいエクステンションとでもいうべきものを求めている傾向がでてきているようです。

たくさんの意見として、総合的な知識が得られるとか、教養が身につくという、教養を高めるための学習に満足しているという声がある一方、専門的なも

のもふやしてほしい、資格取得ができるコースが欲しいなど、資格や学位を求める意見があります。また、カルチャーセンターとどう違うのか、カルチャーセンター的であってほしくない、などの意見が多いです。実際に私も調査員の一人として、放送大学の学生の方々のお宅を訪ねて意見を伺ってきましたが、皆さん、非常に熱心な大人の学習者である、モチベーションは非常に高い。

ただ、その人たちが放送大学を使って何をしようとしているのか、その目的といえますか、その人たちが放送大学から何を得るのか、何を目指しているのか、教養であるか、資格であるのか、その辺は、まだ必ずしもはっきりしていないようです。従来の教養か資格かというだけにとどまらない、さらに大きな新しい放送大学としての可能性を問うていく必要があるいはあるのではないかと。放送大学の学生自身としても、まだ学校が始まったばかりで、自分がそこで何をgetするのかということについての結論をだしていないわけですが、それは放送大学側の課題であると同時に、放送大学生側、学習者自身が回答を見つけていく大きな課題だと思っております。

○司会 どうもありがとうございました。

時間が少し超過きみですけれども、最後に甲田先生に、これまでのお三方のご発表につきましておまとめをお願いいたします。

○甲田 私がまとめられることはありませんが、申し上げるまでもなく一学期を経験したばかりでございまして、現在手探りで暗中模索の状態です。先ほどお話ができましたように、いろんな講義が行われておりますけれども、そういった講義のレベルの差というよりも、実は学生の方は放送授業についてはテレビの方をずっと見て、ラジオは余り聞いていないということが非常にはっきり出ているわけでございます。しかし、テレビとラジオとどちらが学習効果、教育の効果があるかということはまだはっきりしないということでもあります。

ただし、一つだけわかりましたことは、試験を記述式と択一式と二つの方式でやりますと、記述式の論文を書かせる形式の試験にはラジオの方が点数が高いという結果は、ある程度出ております。わかっておりますことはそれだけであります。

それから、これは先ほども申しましたけれども、面接授業の先生は放送授業に出ている先生と一緒に先生が少ないものですから無理もないことなんですが、面接授業に出ている学生が、放送授業と面接授業を全く別のものとして受け取っているということでもあります。したがって、放送授業と面接授業と印刷教材との間にどういう関係が成り立つかと申しますと、残るのは印刷教材だけではないかという一つの考え方がでてくるということでもあります。

三番目は、さっき岩永先生から盛んに攻撃されましたけれども、これは当事者でおられないからそういうのんきな、多様化するというようなことをいっておられるので、私どもからいたしますと、いまちょうどお話ができましたように、教養程度ではなく、もっと専門的なものが欲しいという要望があると同じように、カリキュラムをどう再編成するかということに結びつきますので、実はあえてこの二つは分極化すると、昨年以来それを主張させていただいているわけでもあります。

また、いまのことを前提といたしまして、放送大学では入学試験を全くなしにどんどん入学させておりますので、学生の学力のレベルを私どもは測定できるかということを考えますと、ほとんど不可能ではないかというのが、一学期の経験からえた一つの感想であります。非常に大ざっぱに申しまして、試験を受けた者の大体30%が合格したのではなかろうかというのが一つの推定であります。もし30%が合格するとすれば、実は入学試験は全廃してもいいということにもつながってまいります。

これは大変面倒なことでございまして、もし測定するとすれば、それでは通信指導とか単位認定試験で代替できるかと申しますと、現在、論文を書かせたり択一式のテストをしておりますけれども、通信指導はどうあるべきかということをもう少し考えないと、解決がつかないのではなかろうかということが一つです。

その次は、これも繰り返しになりますけれども、面接授業をどういうふうに位置づけたらいいかが問題として残されておまして、こういうことを片づけませんと、先ほどから問題になっておりますほかの大学との単位互

換とか、あるいはいまのカリキュラムを再編成するにいたしましても、何よりも放送大学の学生が求めているものは、履修条件の柔軟性といったものですから、それにこたえていくことが果たしてできるかどうか、その前提にいま申し上げたようなことが残されているのではなかろうかということでございます。

ご清聴ありがとうございました。

## 質 疑

○司会 どうも甲田先生、ありがとうございました。

予定の時間をかなり過ぎておりますけれども、質疑応答のないシンポジウムはデザートでないディナーだという人もおりますので、少しでも質疑応答の時間を設けたいと思います。

先ほど甲田先生はダー先生のご発表に少し触れられましたので、まず最初にダー先生に、甲田先生、それから、ほかのお三方のご発表について何かコメントがあるかどうかお聞きしてみたいと思います。

もし何かコメント、ご意見、ご感想を、この日本の調査結果に関していただければありがたいと思います。

○ダー いまご報告を伺っております、二、三私としては特に強い印象を持って迫ったものがございました。ですから、その2,3点に関して意見をいつてみたいと思います。

まず第一点としまして、皆様方の放送コースを履修した学生の特性は、私どもが体験しておりますアメリカの学生の特性とよく似たものである、同じであると思ったわけです。それは人口動態的な意味での特性の分布においても同じですし、所得層におきましてもその分布状態が似ていると思います。

それから第二点としまして、ご報告の中で、なぜコースを履修したかという理由に関して学生がいつていること、その動機も非常に似たものがございました。

特に一つ皆様のご注意を促すために例を話したいんですが、私どもアメリカの場合なんですけれども、大変高いパーセンテージの人たちが学生としてこのコースをとるのは、自己啓発をして自己を改善する目的のために履修すると

いっておりました。きょうの最初の私の発表の中ではご披露しなかったんですが、皆さんのお手元に配った資料の中には書いてございます。

それは私どもにとって重要な意味を持つ事実だったんですが、私どものコースの第一学期に入りましたのは15,000～16,000ぐらいの人々だったわけですが、その視聴者は4,000万から5,000万ぐらいはあるわけです。

このAnnenberg/CPB Projectの掲げております目的の中に、我々は大学レベルのコースの教材を開発するためにお金を出すのであるということをうたっております。そして私どもの認識として、何百万人もの人々がアメリカでこれを利用し、活用し、そして大学レベルの教材を自己充足、また、自己の教養を高めるために活用してほしいと思ったわけであります。そのような人々は実際には大学資格を取るということに特別に興味を持たないまでも、教養を高めたいということに目的の一つがあったわけであります。

実際のところ、多くの人々が私どもの大学レベルのテレ・コースを視聴しまして、もう既に大学資格は持っておるという人たちがたくさん見ております。医者も歯医者も、いろんな人たちがおりまして、こういう人たちが教養学部レベルのコースを、専門職のコースと併用してとっております。ですから、私どものコースは彼らにとって一つのチャンスを与えるもの、そして実際には、教養学部や文科系のコースで一般教養科目で聞き忘れたものをここで償おうとしているわけであります。

また、スライドの中でいろいろと見せていただきましたことで一つこれがいえると思います。皆様のように、70%の人たちがVTRを家に持っているというようないい立場に立ちたいと思います。アメリカでも70%ぐらいVTRを持っていますといえる日が、近く実現することを期待しております。

こういうものを使いますと、非常に便利になりますし、大きな危険にもなり得るわけです。先ほど申しましたように、もし学生がテレビのプログラムがある特定の時間に放送されることを承知しておりますと、その学生はテレビの前に必ず座って、勉強するためにスイッチを入れると思います。一方、ビデオ・カセットレコーダーを持っている学生は、それを持っているがゆえに収録をし



ましても、収録したものとちゃんと見直すということをしなくなります。ですから、VTRの持ちます危険性はそこにあると思います。

もう一言コメントを申し上げたいんですが、これは塩崎さんがおっしゃった点なんですけれども、調査研究の内容の中に主観性が入りがちだとおっしゃったんですが、調査の方法論ということを考えまして、調査結果と調査の方法論をあわせて、いわゆる事例研究的な意味の主観的な調査との併用をすること、すなわち普通の社会調査法と事例研究によります主観的な調査法を組み合わせるということは、非常にうまく現実把握につながります。そういう意味で、過去一学期の調査に対しては、ご立派な結果であったと褒めさせていただきたいと思います。

日本とアメリカのそれぞれのプログラムは、非常に大きな類似性があると思います。同じぐらいの年齢であるし、ほぼ同じような経験を蓄積しておりますし、私どもは同じような課題を将来課題として問うておると思います。ぜひこの課題に関しては、将来にわたって継続し続けて頂きたいと思います。

最後に一言、私の方のコメントとしましては、学生がフィードバックに対して希望を多く持っているということ、特に教官・教師からのフィードバックを求めているということでもあります。私どもは、遠隔学習者の孤独という言葉でいっております。これをどうやって解決していったらいいか、その克服の方法を私どもは知らないのであります。いま現在一つ実験として手がけておりますのは、南フロリダの大学で実験中でありまして、これはエレクトロニック・メールのシステムをやっております。すなわちテレビのコースを増強し、強化し、そしてさらに追加的補足をするためのシステムとしてエレクトロニック・メールをやっております。教官側、それから、そのほかのお互い学生同士の交流を深めるために、エレクトロニック・メールシステムを採用してみteおりますが、この実験結果がどのようなものであるか、いま大いに期待して待っているわけでありまして、この遠隔学習者の孤独を克服し得る一つの有効なやり方になればと思っております。

以上です。どうもありがとうございました。

○司会 では、フロアから質問をいただきますけれども、先ほど申し上げましたように時間がかかなり超過しておりますので、一つ二つに限らせていただきたいと思います。

どなたか質問ございますでしょうか。

●就職が放送大学入学の動機になっていないということは、普通の大学と違うということでしょうか。

甲田 個人的な意見としては、結び付かないと思います。一つのタイトルとして学士号を求めているのなら、カリキュラムの再編成も必要ではないでしょうか。

加藤（放送大学教授） いくつかの企業では放送大学の特定の科目を社内教育に使っています。就職のためではなく、オン・ザ・ジョブ・トレーニングとして使われているわけです。

#### 〔参考資料〕 面接授業受講生の一側面

1. 以下の数字は、1985年6月、本学非常勤講師、東洋女子短大勝田晴美講師が、「社会調査」実習のために実施した面接授業受講生を対象とする調査結果の一部であり、勝田氏の許可をえて引用、以下のまとめについての責任は甲田にある。

2. 調査対象はわずかに2クラス、計82名であるが、本学学生の1つの特性をしめしている。男女ともに、30代、40代の割合はいうまでもなく他大学のよりも高率であり、したがって半数は既婚者であって、高卒は60%残りは短大卒以上、専門管理職の率も高く、職業移動の率も30%を越し、月収平均60万を越えるもの10%以上、月100万以上2名を数え、持家54%、自分専用の学習のための部屋と机をもつもの47%、放送授業のための専用のTVとVTRをもつもの39%、本学の学生は他大学生に比して、格段に恵まれた学習条件、もしくは環境にあるといえる。授業料を自分自身の収入によると回答するもの85%である。（表省略）

3. もともと通信制の大学への関心をもっていたものは約30%、それはなによりも時間的拘束のないこと41%、正規の資格の取得可能なこと29%、履修方法

の柔軟性15%（表省略）などからであったが、入学後、受講にもっとも期待していることは、表11の、教養を高める40%、学士号などの資格をうる18%、新しい仕事への準備12%などである。大学が学生から求められているものは、「自分自身を高める教養」といわれているものと、「学士号などの資格」とに分極化する。

4. 現在、放送授業は週に4～6科目を受講するものが多く、面接授業は1～3科目のものが大部分である。学習センターを訪ねるものは面接授業のためだけのものが50%を越え、センターまでの所要時間30分～2時間未満、交通費500円～1,000円未満が大半である。ただし、面接授業を選択した理由は、仕事の上で活用したいというものよりも、曜日の都合と回答したものの方が多い（表省略）。

5. 全体として、放送大学にある程度満足しているもの86.6%、放送授業にたいして82.2%、面接授業にたいして80.5%のものがまあ満足していると回答する、ただし、入学後、仕事、あるいは家事、育児などになんらかの望ましくない影響があったと感じたものは47.5%に達する（表12）。このことは、いくつかの問題点を提起する。

6. 以下いくつかの問題点を列挙すれば以下のとおりである。

i) まず面接授業は放送授業とは直接には結びついてはいない。そして面接授業の選択も、学問的興味や仕事のためよりも、設置された曜日が先行する。

ii) それは放送授業と面接授業の講師の不一致にも大きな問題があるが、何よりも求められている教養の内容と、学士号の取得という2つの分極化した学生集団をかかえていることにもよっている。

iii) 入学後、望ましくない影響が仕事、家事にあったとするが、その内容はあきらかではない。しかし、何を犠牲にしても教養もしくは資格のいずれかを求めるにしても、放送大学がいわゆる各地の文化センターの人々に学士号を与える役割を、結果として果たすことはできるだけ避けたい。要は、求められている教養と、大学の提供するカリキュラムとの間の問題である。

表1 性 別

男	4 4	5 3.7 %
女	3 8	4 6.3

表2 年 齢 別

1 8 ~ 2 4	1 9	2 3.2 %
2 5 ~ 2 9	1 1	1 3.4
3 0 ~ 3 9	2 4	2 9.3
4 0 ~ 4 9	1 8	2 1.9
5 0 ~	1 0	1 2.2

表3 未・既婚別

未 婚	3 7	4 5.1 %
既 婚	4 1	5 0.0
離・死別	4	4.9

表4 家族内での地位

世 帯 主	2 8	3 4.1 %
その配偶者	1 4	1 7.1
世帯主の子・孫	1 8	2 1.9
非 該 当	2 2	2 6.8

表5 学歴別

新・旧中学	4	4.9 %
新 高 校	5 0	6 1.0
新短大・高専	1 7	2 0.7
新大・旧高専・大	1 1	1 3.4

表6 職業別

管理・専門・自由業	18	21.9%
事務職	23	28.1
商・サービス業自営	5	6.1
販売サービス業	9	10.1
生産工程・現業	4	4.9
主婦・パートをふくむ	9	10.1
無職	10	12.2
学生	4	4.9

表7 転職の回数

ない	36	43.9%	26	31.7
1	10	12.2		
2	4	4.9		
3	10	12.2		
4	1	1.2		
5	1	1.2		
非該当	20	24.4		

表8 「手取り」月収

～20万未満	8	9.7%
20～30	18	22.0
30～40	12	14.6
40～50	15	18.3
50～60	9	11.0
60～以上	10	12.2
回答無し	10	12.2

表9 学習のための専用の部屋と机

専用の部屋・机なし	17	20.7%
机はあるが部屋はない	15	18.3
机はないが部屋はある	2	2.4
机も部屋もある	47	57.3
回答なし	1	1.2

表10 放送授業をみるための専用のTVとVTR

専用のTVもVTRもない	6	7.3%
専用のTVはあるがVTRはない	25	30.5
専用のTVはないがVTRはある	18	21.9
専用のTVもVTRもある	32	39.0
無回答	1	1.2

表11 放送大学への期待

学士号などの資格をうる	15	18.3%
仕事に役立つ知識をうる	7	8.5
仕事に対する見方をひろげる	5	6.1
将来の新しい仕事への準備	10	12.2
社会に対する見方をひろげる	4	4.9
自分自身の教養を高める	33	40.2
学習の習慣をつける	1	1.2